

大学生短期訪日研修における体験交流活動型のコースデザイン

熊野七絵

1. はじめに

近年海外で日本語を学ぶ学習者が短期間日本に滞在しながら日本の大学や日本語学校で日本語を学ぶといったコースが増えている⁽¹⁾。国際交流基金関西国際センターでは海外の日本語教育支援の一環として海外で日本語を学ぶ学習者に訪日の機会を提供し、学習継続を奨励することを目的として日本語学習者訪日研修を実施している。これらは10日から6週間といった短期滞在型の研修であり⁽²⁾、日本での滞在を最大限に生かすために日本語研修がデザインされているが、どのような研修が行われているかについての全体像を示す報告は少ない⁽³⁾。本稿では9年間にわたり実施と改善を重ねてきた大学生を対象とした6週間の研修のうち、2006年度冬季に行われた研修を一例に全体像を示し、体験交流型の短期訪日研修のコースデザインの工夫について報告する。

2. 研修の概要

2.1 研修の目的

日本語学習者訪日研修（大学生）（以後大学生研修）は日本語学習者数が急増する等、重点的な支援が必要だと思われる国・地域の大学で訪日の機会に恵まれない学部大学生を招聘し、日本語学習及び日本文化社会の理解を深めるための研修の機会を提供するものである。学生が訪日の機会を得ること、また帰国後他の学習者に学んだことを伝えることにより、当該地域の大学生の日本語学習を一層奨励し、間接的に機関や地域の日本語教育を支援することを目的としている。

そのため、この研修では①これまでに学習してきた日本語を使う②日本を体験し、理解を深める③今後の日本語学習に役立つ発見をする、の3点を目標としている。

2.2 研修参加者

2002年度からは春、秋、冬の3期に実施されており、世界各国の大学生が研修に参加している。研修参加資格は日本語学科等で日本語を履修している大学生で、日本における6ヶ月以上の留学等の経験がなく、日本語能力試験2級程度の日本語力を有するものとされている。実際には各国の大学のカリキュラムにより学習時間やレベルは異なり、初級終了から上級までの多様なレベルの学習者が研修に参加している⁽⁴⁾。参考まで表1に2006年度大学生研修のコース別の研修参加国の一覧を挙げる。

表1 2006年度大学生研修コース別参加者国籍

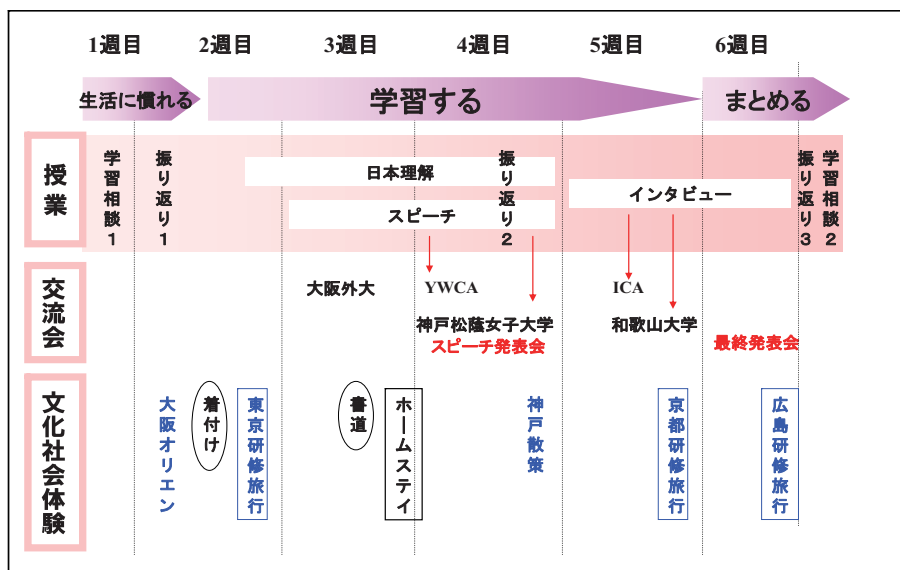
春季 06.5/10-6/21	9カ国 21名	タイ(2)、フィリピン、インド(6)、スリランカ、メキシコ(2)、アゼルバイジャン、ベラルーシ(2)、ロシア(4)、トルコ(2)
秋季 06.10/25-12/6	13カ国 17名	ウクライナ(2)、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、スロバキア、セルビア、チェコ、ハンガリー、ブルガリア、ポーランド(3)、ルーマニア、サウジアラビア、トルコ
冬季 07.1/17-2/28	10カ国 18名	インドネシア(2)、ラオス(2)、アルゼンチン、コロンビア、チリ、ブラジル(4)、イラン(2)、シリア(2)、トルコ、エジプト(2)

* () は同国から複数の研修参加者がいる場合の人数を示す。

2.3 研修の流れ

6週間の研修は表2に示したような流れで構成されている。研修開始時にはオリエンテーションやアイスブレイク、田尻町ガイド（地域の人による町案内）や大阪オリエンティング（研修生4、5人のグループで自力で大阪市内の目標地へ行き日本人と会話しながらタスクを果たす活動）など、日本の生活や地域、各国から来た仲間同士に慣れるための活動が行われる。また、この時期は同時に教師と1対1の学習相談や研修生同士の自国での学習の振り返りを通じて、6週間の研修での自分の目標を設定する時期でもある。研修中盤は学び、体験する時期である。他の学習者とともに教室での学習と外での体験や交流を繰り返し、各自が体験の中から自分の日本・日本人像、学習目標を振り返り、構築していく。そして、研修の終わりでは発表会で、日本で学び、体験した成果をまとめて発表するとともに、研修を振り返り、継続学習への目標を設定する。

表2 研修の流れ



2.4 研修内容

研修内容は上述の目標を達成するため、「日本語授業」「交流会」「日本文化社会体験」で構成され、表3のような授業、活動が実施されている。

表3 研修内容一覧（2006年度冬季の一例）

	授業、活動名	内容
日本語授業	日本理解（22コマ）※50分授業 スピーチ（14コマ） インタビュー（21コマ） 自律学習（20コマ） コンピュータ（3コマ） 旅行ガイド（6コマ）	トピック別資料に基づく学習とディスカッション 自国や専門についての会話や作文、発表 グループインタビュープロジェクト 学習相談、学習の振り返り、週フィードバックなど PPT作成、日本語Eメール、日本語学習サイト紹介 研修旅行前にペアで情報を調べて発表する
交流会	大阪外国語大学留学生 神戸YWCA学院 神戸松蔭女子学院大学大学生 泉佐野地球交流協会（ICA） 和歌山大学大学生	留学生による授業見学と研修生による館内案内 スピーチと関連したグループ会話と自由会話 大学訪問とスピーチ発表会、神戸散策 グループインタビュー（第1回）と自由会話 グループインタビュー（第2回）と自由会話
発表会	スピーチ発表会 インタビュー発表会	神戸松蔭女子学院大学交流会にて実施 研修の総括としての最終発表会
社会体験	田尻町ガイド 大阪オリエンテーリング（1日） 東京研修（2泊3日、1日自由行動） ホームステイ（1泊2日） 神戸散策（半日） 京都研修（1日） 広島研修（2泊3日）	田尻町国際クラブによる町内案内 グループで自力で大阪の目標地を回るタスク活動 東京タワー、銀座（希望者のみ歌舞伎）、浅草、江戸 東京博物館、パナソニックセンターを見学 地域の家庭でのホームステイ 大学生とのグループ散策 金閣寺、河原町、竜安寺、清水寺を見学 宮島厳島神社、平和記念公園、原爆資料館を見学
文化体験	着付け 書道 オプション（茶道、華道）	着物着付け体験と解説 書道体験と解説 公民館での公開講座（希望者のみ）

2.5 日本語授業

2.5.1 「日本理解」

日本や日本人に関するさまざまなトピックの学習の中で①データを分析する力をつけ、日本語で説明できる②ディスカッションを行い、効果的に自分の意見を伝える③資料や体験、自国・他国との比較から日本や日本人について再考し、より深く理解することを目指している。教材は研修オリジナルの自主制作教材を使用している。各課のトピックと内容は表4に示した通りである。

表4 「日本理解」のトピックと内容

	トピック	内容
1	イメージ	今もっている日本・日本人のイメージについて考え、ポスターにまとめる。
2	伝統行事	伝統的な行事、宗教、習慣が生活とどう関係しているのか考える。
3	ポップカルチャー	世界で人気がある日本のマンガ・アニメやキャラクターの人気の理由を考える。
4	女性	結婚と女性の生き方の変化、男女の役割、子育てについて考える。
5	話しことば	丁寧体と普通体、方言、若者言葉など話しことばのバリエーションを知る。
6	家族	ホームステイで感じたことから家族関係について考える。
7	教育	塾の是非、学力低下の原因と対策など教育問題について考える。
8	大学生	大学生の勉強、アルバイトなど大学生の生活について考える。
9	まとめ	体験による日本・日本人のイメージの変化をポスターにまとめる。

各トピックのテキストの流れは以下の通りである。

- ①「話しましょう」質問に答えながら日本について持っているイメージを整理し、自国との比較を行い、まとまった話をするパターンを身につける
- ②「便利な表現」上の質問に答える時に便利な表現・語彙リストや談話展開パターン
- ③「グラフ・表を見て考えましょう」日本についてのグラフ・表を見て理解し、説明、意見を述べる
- ④「最近の日本について考えましょう」ステレオタイプとは違う多様化する日本・日本人を理解し、意見を述べたり、ディスカッションしたりする。
- ⑤「いろいろな資料を見て考えましょう」④と同様で余力のある学習者向け
- ⑥「読み物」継続学習にもつながる上級レベル用の本や新聞記事からの生教材
- ⑦「参考」参考情報（ことわざ、年中行事、オノマトペ等）やさらに知りたい情報のURL

まず、来日直後の初回の授業で各自が持っている日本・日本人のイメージキーワードを引き出し、みんなでポスターにまとめる。各トピックについて①②は予習とし、日本について知っていることや自国の状況説明のための語彙や表現を準備してクラスに臨む。クラスではさまざまな資料からステレオタイプのものから多様化する現状までの知識や語彙を得るとともに、ディスカッションを通じて各自の問題意識を高める。資料は難易度別となっており、レベルに応じて取捨選択することができる。また、各トピックはホームステイや大学生との交流会などの活動と関連づけられており、体験、交流の準備や振り返りともなっている。各トピックの授業の最終回には日本での体験や学習を経て変化したイメージについてクラスで話し合いながらポスターにまとめ、初回のもものと比較することで日本や日本人への理解の深まりを確認する。

2.5.2 「スピーチ」

スピーチの授業、2回の日本人との交流会を通して、自国（まつり、地理・民族・宗教、観光）や自分の専門について①談話構成に気をつけ、まとまった話ができる②日本人と会話を広げることができる③発音、視覚資料の使い方など基本的な発表技術を学び、魅力的なスピーチ発表を行うことを目指す。『初級からの日本語スピーチ』（国際交流基金関西国際センター編、凡人社）を使用し、授業での導入や練習後、上記のトピックについてのグループ会話を中心とした交流会を行い、そのフィードバックをもとに各自のテーマを決め、交流先でスピーチ発表会を行う。内容や手順は表5の通りである。

表5 「スピーチ」の内容と手順

	内容	手順
1	いいスピーチとは何か、L1まつり 導入	次のクラスまでに全員 L1 原稿を書いてくる。
2	L1 確認 L2 地理・民族・宗教 導入	L1 発表者は先生のチェック。全員 L1 提出 L2 原稿宿題。
3	L1発表 L2 確認 L3 私の専門 導入	L2 発表者は先生のチェック。全員 L2 提出 L3 原稿宿題。
4	L2 発表 L3 確認 L4 観光 導入	L3 発表者は先生のチェック。全員 L3 提出 L4 原稿宿題。
5	L3 発表 L4 確認 交流会準備(会話練習)	L4 全員提出。
	交流会で国についてグループで <u>会話</u>	国の紹介のための地図や写真を持ってくる。
6	交流会 FB、発表会テーマ決定、原稿作成	スピーチ原稿を完成、提出。モデルテープで、練習。
7	発表練習、ビデオで自分の発表チェック	リハーサルのため。司会、ビデオ係りも決める。
	交流先大学で <u>スピーチ発表会</u>	民族衣装、地図や写真などを持参。

2.5.3 「インタビュー」

「日本理解」で学んだ内容からグループごとに1つのテーマを選び、2回の交流会で日本人へのインタビューを行い、結果をまとめて発表する。その過程で①テーマに沿った質問とその選択肢を用意し、仮説をたててインタビューする②インタビューから得た情報を分析し、自国・他国との比較から日本や日本人について再考し、より深く理解することを目指す。オリジナルの自主制作教材を使用し、各授業は表6に挙げたように進められる。2回の交流会インタビューではビデオ録画、テープ録音などを行い、クラスでインタビューのフィードバックを行ったり、交流会で理解できなかった部分を聞きなおして確認したりするために利用する。インタビュー結果の発表は研修の総括の発表会として実施される。

表6 「インタビュー」の内容と手順

	内容・手順	
1	はじめに	テーマ選択、グループ結成、リーダー選出。インタビュー作業計画を立てて提出。
2	はじめに	質問、選択肢、仮説を考える。各質問に関連性をもたせ、4つの選択肢を決定。

	インタビュー1	地域の国際交流団体に対して1回目のインタビューを実施。
3	1回目をおえて	初回インタビュー結果報告と振り返り。グループ作業分担、質問の適切さの確認。
4	2回目のために	表現の振り返り(表現、あいづち、メモ取り)。結果分析と質問や選択肢の修正。
	インタビュー2	大学生に対して1回目のインタビューを実施。
5	まとめましょう	2回目のインタビューの振り返り、データの整理、自国との比較、分析。
6	まとめましょう	インタビュー結果のまとめ、レジュメ作成、提出。
7	発表の前に	発表原稿作成、提出。視覚資料(パワーポイントか配布レジュメ)作成。
8	発表の前に	司会のことば、質疑応答の方法。視覚資料提出。
9	練習しましょう	リハーサル。発表態度、機器の確認等
	発表会	グループごとにインタビュー結果の発表を行う。

2.5.4 「自律学習」

自分自身の日本語学習を振り返り、目標を立て、自己評価する中で自律的な学習者となることを目指す。「学習相談」(研修開始時と終了時の2回個別に)、「学習の振り返り」(クラスで3回)、「週フィードバック」(全員で各週始めに)の他、「プログラム理解」や継続学習に役立つ「教材紹介」を含む活動を行う。内容の詳細は表7参照のこと。「活動記録」は「週フィードバック」終了後に提出した後、担当教師による間違いの訂正や内容へのコメントを付してから返却される。自分自身への振り返りと教師やクラスメートとの共有が繰り返される中で自律学習への方向性づけを行う。

表7 「自律学習」内容と手順

		内容と手順
1	学習相談①	教師と1対1で20分、自分の日本語運用力、学習目標について相談する。
2	プログラム理解	研修の全体の流れ、目標、日本語科目について理解する。
3	学習の振り返り①	クラスメートと日本語学習の目標と研修中の目標について考える。
4	週フィードバック	前の週を振り返り、日本語学習や生活、体験の中での発見、自己目標の達成度を書いた「活動記録」をもとに、グループで報告しあい、全体で共有する。
5	学習の振り返り②	クラスメートと学習方法について振り返り、情報を共有する。
6	教材紹介	帰国後の継続学習に役立つ多数の市販教材を実際に見てみる。
7	学習の振り返り③	クラスメートと6週間の研修を振り返り、帰国後の学習目標について考える。
8	学習相談②	各自のポートフォリオ評価『研修の記録』を元に教師と1対1で研修の評価を行い、継続学習の方向性を確認する。

2.6 評価

本研修の目的は日本語学習の奨励であること、また各研修参加者の日本語学習、日本理解へのニーズや自国での学習環境、レベルが多様であり、文法や漢字の項目積み上げより体験や発信を重視していることから、数値評価はおこなわず、以下①～⑤を『研修の記録』にまとめたポートフォリオ評価をおこなっている。『研修の記録』は研修終了時の個別の学習相談で研修参加者に渡し、口頭でアドバイスを行い、派遣元大学にも複写を渡している。

- ①「研修の目標と内容の説明」研修の目標と、研修内容（日本語授業、日本人との交流、社会体験、文化体験、発表会）を一覧にしたもの（日本語版と英語版）。
- ②「自己目標・自己評価シート」研修開始時に、a) 日本語学習について、b) 日本での体験について研修参加者自身がそれぞれ自己目標を立て、研修終了時にそれに対する自己評価を行うとともに、c) 帰国後の継続学習の目標を記述したもの。
- ③「活動記録」1週間ごとに自己の日本語学習や日本理解を振り返り記述する「活動記録」計6回分をまとめたもの。
- ④「発表会の成果」スピーチ発表会原稿、インタビュー発表会原稿と視覚資料（パワーポイント資料か配布レジュメ）。
- ⑤「教師からのアドバイス」担当教師からの研修参加態度や日本語能力面、日本理解面についての所見、今後の学習に向けてのアドバイスを記述したもの。

3. コースデザインの工夫

3.1 日本語授業の変遷

関西国際センターでは1998年から大学生研修を実施しており、境田（2003）では1998年から2002年までの研修を概観し、2002年当時の日本語科目のうち「日本理解」「ナレーション」「学習ストラテジー」について報告している。その後、研修の目標等には変化はないが、日本語科目は変遷を経て、2005年度以降は「日本理解」「インタビュー発表」「日本語技能」の3科目にまとまり、発信をさらに重視するものとなった。なお、「日本語技能」の内容は学習の振り返り、スピーチ、会話スタイル、小論文と多様な内容を含むものであった。

「インタビュー発表」はグループで選んだテーマについて実際に日本人への街頭インタビューを行ったり、農業、漁業、お寺、工場などの地域の仕事現場に行き、その職業のプロにインタビューを行ったりするなどの活動が行われてきた。これらの活動は、普通の日本人と専門用語や方言を含む実践的なコミュニケーションができ、達成感も大きい。ただ、このような活動を行う場合、周到的な準備やフィードバックが必要であるため、スケジュール上でも「インタビュー発表」が研修当初から最終発表会に向けて全体にまたがり、研修生にとってタスクとしての負担も大きかった。そのため、複数の担当講師から、日本語力

が比較的低い冬季研修においては「インタビュー」は難しく、時間をかける割に深まらない、交流会に向けて数回だけ行われていた「スピーチ」の授業を手厚くしたほうがレベルにはあっているのではないかとの指摘があった。

これまでも、コースによって異なるレベル差へは対応がなされてきた。既に記述したように「日本理解」で同一の教材をレベルによって使い分けられるように構成しているほか、レベルの高い秋季では最終発表に加えて「小論文」の課題も課す一方、冬季では「小論文」は課さず「発音練習」に変える、などである。しかし、基本的な科目立てやスケジュールへの大きな変更はなかった。そこで、2006年度に筆者が担当したコースにおいては冬季研修生のレベルに合った、さらにわかりやすいコースデザインへの改善を目指すこととした。

3.2 2006年度（冬季）のコースデザイン改善点

2006年度（冬季）のコースデザインで改善した点は以下の3点である。

- ①冬季研修生のレベルに合った科目編成と流れの見直し
- ②交流会や発表会の位置づけと負担分散
- ③「自律学習」の科目立てと週フィードバックの導入

まず、スケジュール上さまざまな科目が研修全体にわたり複雑に入り混じっていたものをわかりやすくするため、研修前半の午前は「日本理解」、午後は「スピーチ」を軸とし、研修後半を「インタビュー」に集中することとした（表8参照）。これは初級終了程度の研修生にとって、研修開始時に問題意識をもってインタビューテーマを設定することが難しかったことへの対応でもある。研修前半のトピック別の「日本理解」で日本の文化社会についてさまざまな資料を通じて学習し、説明するための語彙や表現を獲得し、仲間とのディスカッションで問題意識を高めた上でテーマ設定をすることができるからである。また、「スピーチ」で発表技術（発音や発表態度、発表資料作成）について学び、発表体験を積むことが、インタビュープロジェクトの成果を発表する最終発表会の準備ともなる。

また、これまでは交流会スケジュールに合わせて2、3回スピーチの導入、練習を行い交流会で発表するのみだったが、冬季研修生のレベルに合わせて「スピーチ」を科目として設定することで位置づけを変え、「スピーチ」授業の中でクラス内練習を重ねるとともに、日本人を相手にする実際の「会話体験」と「発表会体験」の機会として交流会を組みこむこととした。インタビュープロジェクトも日本語力が低い場合、街頭インタビューや地域のお仕事インタビューなどは相手の発言による自由度が高く、日本語面での負担が大きいことから、事前に仮説を立て、選択肢を作成した上でそれを基礎にして話を広げる形とし、交流会の機会を利用して2回のインタビューを行うこととした。このように中間的な発表会として「スピーチ」、最終発表として「インタビュー」と分散させること、交流会を授業と連動させるなどのスケジュール上の配置はこれまで研修終了時に一気に発表や論文などの課題が課されていた負担を軽減することも意図したものである。

表8 全体スケジュール（2006年度冬季大学生研修）

		1	2	3	4	5	6						
		9:00-9:50	10:00-10:50	11:00-11:50	13:20-14:10	14:20-15:10	15:20以降						
18	木	生活オリエンテーション			ブレースメントテスト		図書館ガイド						
19	金	学習相談①+インタビュー			アイスブレイク、プログラム理解		PCガイド						
20	土	田尻町ガイド											
21	日												
22	月	日本ガイド	日本理解①		学習の振り返り①		連絡会						
23	火	大阪ガイド	大阪オリエンテーリング										
24	水	PC①	大阪発表	東京ガイド	文化体験① 着付け								
25	木	東京研修旅行											
26	金												
27	土												
28	日												
29	月	週フィードバック	日本理解②		スピーチ①								
30	火		日本理解③	カラオケ	スピーチ②		交流会1						
31	水		日本理解④		スピーチ③		連絡会						
1	木		日本理解⑤	PC②	スピーチ④		茶道（オプション）						
2	金	文化体験② 書道			スピーチ⑤		華道（オプション）						
3	土	ホームステイ											
4	日	ホームステイ											
5	月	週フィードバック	日本理解⑥		交流会2 スピーチトピック会話								
6	火		日本理解⑦		スピーチ⑥		連絡会、神戸ガイド						
7	水		日本理解⑧		学習のふりかえり②								
8	木		日本理解⑨	PC③	スピーチ⑦		教材紹介						
9	金	交流会3 スピーチ発表会			キャンパス・神戸散策								
10	土												
11	日												
12	月												
13	火	週フィードバック	インタビュー①		インタビュー②		連絡会、京都ガイド						
14	水	交流会4 インタビュー1			インタビュー③								
15	木	インタビュー④			交流会5 インタビュー2								
16	金	京都研修旅行											
17	土												
18	日												
19	月	週フィードバック	インタビュー⑤		インタビュー⑥								
20	火		インタビュー⑦		インタビュー⑧		連絡会、広島ガイド						
21	水		インタビュー⑨		インタビュー発表会								
22	木	広島研修旅行											
23	金												
24	土												
25	日												
26	月	発表会フィードバック、学習の振り返り③			最終連絡会								
27	火	学習相談②			歓送会								

また、さまざまな内容が入ってわかりにくくなっていた「日本語技能」を解体し、「スピーチ」と「自律学習」を独立させた。特に、「自律学習」として科目を設定したのは、これまで継続学習を促す自律学習を重視し、「学習相談」や「学習のふり返し」、「活動記録」などさまざまな取り組みに力を入れてきたにもかかわらず、その一連の活動の関係が研修生には理解しにくいものとなっていたからである。「自律学習」という科目立てを行うことで、一連の活動の目的や関連がわかりやすくなると考えた。また、これまで「活動記録」は学習者個人と担当教師とのやりとりで終わっていたが、これをさらに活用するために「週フィードバック」の時間を新設することにした。学習者同士でお互いの日本語学習や体験における発見を共有することで、より深い理解と内省が進むと考えたためである。

3.3 研修の評価

研修終了時に研修生に行ったアンケート結果の一部を表9に示す。

表9 研修アンケート結果

		不満足 1	2	3	4 満足
	研修全体	0	0	0	18
目標達成	日本語の運用	0	1	8	9
	体験と日本への理解	0	0	3	15
	継続学習のために役立つ発見	0	0	7	11
日本語授業	日本理解	0	0	7	11
	スピーチ	0	0	4	14
	インタビュー	0	1	5	12
	自律学習	0	0	6	11

* 数字は18人中の人数。自律学習について未回答が1名。

研修全体への評価は非常に高く、全員が4と評価している。また、同アンケートや帰国後のレポートには、研修生から以下のようなコメントが記されている⁽⁵⁾。

<全体について>

- 授業の進め方はとてもいいと思う。ふつうの日本語の授業と違って、人とたくさん話せるような授業だった。それは本当に大切だと思う。
- 全部の授業は大変おもしろかった。『日本や日本人についての理解を深める』という目標を完璧に達成したと思う。いつも授業内容やディスカッションなどのおかげでいろいろな発見ができた。
- 研修では授業でも社会体験でも全員が日本語で説明したり、ディスカッションしたりした。

- このプログラムは短いのに、私たちは今まで習ったことを復習できた。私の国の授業でこんな教え方をしないので、私にとって本当におもしろくて役に立った。

<日本語授業について>

- 一番役に立ったのは「スピーチ」だった。なぜなら毎日スピーチを書いたり、友達と練習したり、日本人と2回練習したりしなければならなかったから。
- スピーチはあまり好きではなかったが、スピーチの発表の後で私の日本語、特に発音が良くなったとわかった。
- 人前で話すのが大嫌いだったのに、「スピーチ」のおかげで語彙を調べたり、一生懸命メモしたりした。発表の時みんなが質問してくれてうれしかった。無口な私が司会や発表をさせられたので、すごく緊張したが、メモを作ってうまくできた。
- はじめて日本語で発表し、前より自信がついて落ち着いて日本語で話せるようになった。
- 日本について少ししか知らなかったが、「日本理解」の授業の中でデータを分析したり、日本語で説明したりして、ディスカッションの中で自分の意見を伝えられるようになった。
- いろいろな国から来た学生がいたので、日本の文化と比べながらいろいろな国の文化や状況を知ることができた。
- 「日本理解」で学んだ言葉を実際のインタビュー活動で使ったり聞いたりした。
- 日本人との交流があって、若者言葉やお年寄りの言葉をきくことができ興味深かった。

<帰国後の学習に役立つ発見について>

- 今までの生活や勉強や私の将来について考えさせられ、世界の見方が変わった。「日本語の勉強はこれからだ！今までより一生懸命がんばろう！」と決意した。
- これまで難しい言葉や漢字をたくさん覚えるだけだったけど実際の生活では使えないということも実感し、会話の重要性など新しい学習方法をみつけた。
- 自分で目標をたてるようになった。
- 関西センターの先生方と他の研修生が言ったことを参考に新しい勉強の仕方を習ったので、今から会話をする機会がない問題を解決するために日本語のサークルを作るつもりだ。

まず、「スピーチ」は数値でも高い評価を得ており、帰国後のコメント記述も多かった。多くの研修生にとって「スピーチ」が日本語での発表の初めての機会だったこともあり、クラス練習を経ての交流会、発表会が実際に日本語の運用力の伸びを感じさせるものだったと考えられる。次に、「日本理解」や「インタビュー」については単独の授業だけでなく、いろいろな国からのクラスメートや日本人との交流、あるいは授業間の関連に触れていることから、これらの有機的なつながりが日本や日本人への理解を深めていくた

めにうまく機能していたと考えられる。また、各自が新たな学習目標や将来の目標に向かう前向きな姿勢を示している。このように、冬季の研修生のレベルに合わせたコースデザインの改善は有効に機能し、スピーチの有効性、科目間の連携と段階的設定、自律学習の意識化において狙いが達成できたと考えられる。

さらに、派遣元の大学の教師に対して行った帰国後アンケートの記述にも同様の傾向がみられた。帰国後の変化として多く挙げられていたのは、学習意欲が高まった、運用能力を中心に日本語力がめざましく向上した、自信がついた、消極的だった学生が積極的になった、留学や将来の仕事など新たな目標に向かう姿勢ができたなどであった。また、コースデザインについては、以下のような点が評価されている。

- 学習者の主体的な活動に重点が置かれ、日本語能力の向上に効果的。
- 発表会、文化社会体験、交流などの活動は日本語や文化の理解をいっそう深める取り組み。
- 「活動記録」は忙しいプログラムを自分なりに消化し、記憶にとどめるために非常にいい方法。丁寧にチェックやアドバイスがあることで、研修後も自分でフィードバックができ、今後の学習を定めることができる。
- 他の国で日本語を学ぶ様々なレベルの学生と一緒に研修をすることでいい刺激を受け、自分の日本語能力について客観的に知ることができる。

また、帰国後にほとんどの研修生が大学の日本語コースの学生を対象としたものをはじめ、学生会のイベント、学科主催のフォーラムや中等教育機関で成果報告会を行っている。研修生からは「日本語で2回、母語で3回、計130人への報告会を行った」「みんな興味を持ち多くの質問が出た」「クラスメートが一生懸命勉強して次は自分が行きたいと言っている」「友達も積極的に日本語を使うようになった」「1年生の後輩が、報告を聞いた日家に帰って5時間一生懸命勉強したと言ってくれてうれしかった」などの報告があり、個人にとどまらず国で日本語を学ぶ多くの学生に影響を与えていることがわかる。派遣元の教師からも日本人との交流や訪日機会が限られる地域においてこの研修に参加できる機会は貴重であり、他の学習者への波及効果も高いと多くの声が届けられている。

このように、研修生や大学による評価、コメントから、改善すべき点は残しつつも、この研修の目標「日本語を使う」「日本を体験、理解する」「今後の学習に役立つ発見をする」が達成され、間接的に海外の大学や地域支援にも貢献しているといえるだろう。

4. 考察

短期滞在型の日本語学習奨励研修において、上記のような目標を達成するためのコースデザインのポイントについてここで考察したい。

4.1 段階的設定－日本語を使う－

まず、ほとんどの研修生にとって初めての来日経験であるということを考慮し、スケジュー

ル上日本や仲間に慣れるための段階的な配置を行うということである。この点で研修開始時の大阪オリエンテーリングが果たす役割は非常に大きい。大阪オリエンテーリングではあえて異なる国の研修生同士が混じるようにグループ分けをし、研修生は教師に頼らず自分たちで目的地にたどり着き、とった写真などを利用してグループでパワーポイントを作成して発表する。この協働タスク自体が仲間や地域に慣れると同時に発表を経験する最初のステップになる。前半に日本理解とスピーチ、後半にインタビューを配置し、交流や発表会を段階的に組みこんだことも、短期間の研修をスムーズに行い、研修生が日本語を使う機会を最大限に活用するためのスケジュール作りにおける段階的設定の工夫である。

次にタスク自体に段階を設定し、繰り返すということである。この研修の中で「発表」というタスクは大きな位置を占めているが、最終発表に至るまでに数多くのステップがある。大阪オリエンテーリングの発表をはじめとして、スピーチのクラスではクラス内練習、交流会での会話、クラス内発表リハーサル、発表会と発表体験が段階づけられている。発表経験を積み、発表技術を磨いた上でインタビュープロジェクトの最終発表会に臨むのである。Brown& Yule(1983)ではコミュニケーション・ストレスという概念で話しやすい状況と困難な状況を説明している。聞き手が同輩でプライベートな状況、言語能力が同等でインフォメーションギャップがあり、タスクに必要な知識や語彙に通じていればストレスが低く話しやすいが、逆だとストレスが強くなり話しづらいというものである。また、Bygate (1999) では同じタスクを繰り返し行うことは特定の運用における流暢さ、複雑さ、正確さの向上に効果があるとの結果も報告されている。日本語力の低い学習者にとって人前で日本語で発表するというのは非常にハードルが高いタスクである。当研修での発表に向けての段階づけでは、初めは言語能力が同等のクラスメートとの自国や専門という身近でありながら相手は知らないことについての少人数の会話から始まり、徐々に相手が日本人になり、発表というフォーマルな場になり、最後はインタビュープロジェクトをまとめた総括的な発表会の場となるという段階付けがなされている。また、スピーチ、インタビューともに日本人との交流でその力を試す機会は2回ずつ与えられ、1回目のフィードバックを得てもう一度試す機会を提供している。いきなり発表させるのではなく、タスクを段階的に設置し繰り返すことが、発表に慣れ、自信や達成感につながるとともに、運用力の向上という効果ももたらしたと考えられる。「発表」に限らず「会話」や「作文」などのタスクも同様に、科目をまたがり多くのステップが組み込まれ、段階的に配置されている。

また、内容面でも段階化が行われている。「日本理解」の教材はそれ自体が難易度によって段階づけされているとともに、内容もステレオタイプのものから視点を変えたさまざまな資料へとステップを踏む中で深まり、ディスカッションから多面的な理解へとつなげるものとなっている。「日本理解」で深まった前知識や疑問点をもとに「インタビュー」へとつなげる設定は、インタビュー内容の焦点化、深化に役立つだけでなく、日本語面

での前準備の役割を果たすものでもあり、この内容面でのステップづくりは多様なレベルへの対応ともなっている。

4.2 外とつなぐー日本を体験、理解するー

体験交流活動と日本語の授業をつなぐ工夫も重要である。Kolb (1984) は体験学習は具体的体験、内省的観察、抽象的概念化、実験試行の4つのステージによる学習サイクルの循環的なプロセスだと述べている。この研修の中でも日本での体験と日本語授業の中でこのような循環的なプロセスが繰り返されている。まず、「日本理解」の授業はホームステイや日本人との交流などの体験交流活動と関連し、準備や振り返りのプロセスともなっている。例えば、ホームステイに行く前には生活における伝統文化、家事の分担、話し言葉や方言などホームステイ体験に関連した内容を学び、前準備が行われる。ホームステイでは目に見える点（仏壇があるかなど）、見えない点（家族関係など）双方の観察ポイントをタスクとし、ホームステイ後には「家族」をトピックに体験した日本の家族や生活を自国や他国と比較しながらディスカッションする。研修旅行もこれまで教師による事前ガイドのみであったのを、単なる観光に終わらないよう、ペアによる調べタスクを行い、発表して全体で共有してから、旅行に臨むこととした。このように外での活動をより一層深めるための“準備”と活動後の“振り返り”は「スピーチ」「インタビュー」を含めすべての日本語授業に共通である。さらに、「活動記録」で各自が定期的に内省を行う機会を設けている。体験から日本・日本人への理解を深めるためには、単なる受動的な体験に終わらず、自ら主体的に関わり、振り返って考え、また体験するという循環的なプロセスが必要だと考えるからである。また、準備や振り返りは周到に行いながらも“体験”自体には教師があまり介入しないこともポイントである。

4.3 協働と自律ー今後の学習に役立つ発見をするー

自律的学習の意識づけには、実は個別対応だけでなく、他の学習者との協働学習が非常に有効である。池田・館岡（2007）では協働学習における他者との関わりは個々の内省を促し、新たな発見や創造を生み出すことを指摘している。この研修ではほとんどの活動において教師はファシリテーターとしての役割を果たし、学習者同士が主体となった協働活動が行われている。このような活動型のコースデザインではレベルの差があっても互いの良さを引き出し、刺激しあい、そこから各自が自分なりの発見をすることができる。日本語学習、日本理解、継続目標の全ての面において他の学習者との「協働」と各々の「内省」を繰り返すことが、教師主導を望む受動的な学習者から、自らの学習方法や目標をみつけ主体的に取り組む自律的な学習者への成長を促していると考えられる。

5. おわりに

本稿では大学生研修を例にとり、学習奨励研修のコースデザインの報告、考察を行った。これは9年間の積み重ねに基づいた研修の一例にすぎない。研修生のレベルやニーズに合わせたバリエーションづくり、体験交流活動で実際に使われている日本語と学習内容との比較・検証、自律学習を支える仕組みのさらなる改善など残された課題も多い。今後も研修を振り返りながら、よりよい研修を目指し、コースデザインの改善を続けていきたい。

〔注〕

- (1) 古くから夏季短期日本語研修の形で特定の大学との交換留学を行う大学は多いが、大学では単位互換性の観点などから数値としての授業数、成績評価が求められることも多い。また、科学技術など特定の専門や企業研修を睨んだカリキュラムが組まれるなど、訪日による日本語学習奨励を目的とする当センターの日本語研修とは性格は異なる。また、近年短期留学制度が急速に拡大しているが、英語での講義を中心としたカリキュラムで授業内容の充実、国際化を図るのを主眼とし、日本語授業は希望者にも開講という副次的扱いのものも多い。一方、日本語学校等でも海外の学習者を対象とし、ホームステイや文化体験などを組み入れた短期訪日コースの取り組みが活発化している。
- (2) 関西国際センターにおいて学習奨励研修として実施されている日本語学習者訪日研修には大学生を対象とした6週間の研修の他、成績優秀者研修（2週間）、高校生研修（2週間）、李秀賢氏記念韓国青年招聘研修（10日間）がある。
- (3) これまで大学生研修については、境田（2003）が1998年度から2002年度までの研修の概観と2002年度時点の日本語授業について報告している。他に、文化理解の観点から大学生研修の「日本理解」のための学習プロセスを分析したもの（田中2004）、大学生研修における学習相談での教師の役割を検証したもの（和泉元・野畑 2006）があるが、特定の視点からの分析であり、研修の全体像を示すものではない。
- (4) 3季のうち秋季は日本語力が高く、冬季はやや低い傾向がある。例えば、日本語能力試験の2級～3級レベルの同じプレースメントテスト（筆記・聴解）を用いた結果で、2006年度秋季は全員が60%以上であったのに対し、同冬季は60%以下が18名中10名と半数以上を占める結果であった。
- (5) コメントは研修終了時の「コース評価アンケート」と帰国1ヵ月後に提出する「帰国後のレポート」における研修生のコメントの一部を抜粋したものであるが、筆者が丁寧体を普通体にしたり、文法上の誤りを直したりした部分もある。尚、派遣元大学の日本語担当教師にも「帰国後アンケート」を実施しており、後述のコメントはコースデザイン、学生の変化や研修の成果、成果報告と波及効果などについての質問に対する自由記述からの抜粋である。

〔参考文献〕

- 池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門－創造的な学びのデザインのために』、ひつじ書房
- 和泉元千春・野畑理佳（2006）「『学習相談』における教師の役割に関する一考察－学習者と教師間の認識のずれを埋める交渉に着目して－」『2006年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、215-216
- 境田徹（2003）「大学学部生への研修における日本語授業－新たな学習視点を啓発するための授業科目－」『日本語学』、7月号、78-89、明治書院
- 田中哲哉（2004）「『日本理解』のための取り組み」『日本語学』、2月号、82-95、明治書院
- Brown, G. and G. Yule. (1983) *Teaching Spoken Language*. Cambridge University Press.
- Bygate, M. (1999) Task as context for the framing, reframing and unframing of language. *System*, 27, pp.33-48
- Kolb, D. (1984) *Experiential learning: Experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.